第7回サステナブルデザイン国際会議

# Destination 2020

デスティネーション2020

The 7th International Conference of Design for Sustainability

2012

# 報告書

Report

photographed by Hiroshi Homma

## ■ テーマ

### アジアン・サステナビリティ／ Asian Sustainability

急速な経済発展を遂げつつあるアジア諸国は、必ずしも欧米流のサステナビリティの枠には収まらないダイナミズムを持っている。そのエネルギーを温存したままで自然環境とのバランスの保つアジア型のサステナブルな社会を築くことができるなら、それは、これからの文明の在り方のモデルたり得るのではないか。

# サステナブルデザイン国際会議
# Destination2012-2020
# 報告書

## もくじ


02 もくじ／
サステナブルデザイン国際会議の開催の経緯と現在まで
04 はじめに／実行委員会委員名簿
05 開催概要／プログラム

06 トラベリング・ワークショップ／開会にあたって／プログラム
07 ラオ・ソン（タイ・ソン・ダム）民族村
津田 和俊／大阪大学 助教
08 スナンタワナラーム森林寺
鈴木勝美
09 ドンワイ寺院とドンワイ水上マーケット
本田 圭吾／専門学校 桑沢デザイン研究所 専任教員
10 グループディスカッション

11 カンファレンス「Work In Progress」
12 講演 1「Magno Manifest」
シンギー・カルトノ氏｜ magno デザイナー、設立者
14 講演 2「Social Innovation Sustainability」
益田 文和氏｜東京造形大学教授、本会議実行委員長
16 講演 3「??????????????」
ハン・コニング氏｜プロダクトデザイナー、
ハンゼ応用科学大学教授／オランダ、フローニンゲン
パネルディスカッション
「Work in Progress for Sustainable Design ／
サステナブルデザインに向かう過程」
17 トラベリング・ワークショップ　プレゼンテーション
18 前夜祭「Designers Accord Tokyo Town Hall」
展示会「2023 年のサステナブルデザイ

19 コラム「微笑みのタイ経由、つぎを探す旅へ」
酒井 良治／アールパートナー（株）代表
20 次回告知

# What is ?

## サステナブルデザイン国際会議とは?

### ■ 開催の経緯と現在まで

世界規模で急速に拡大する生産・消費活動が、私達の生活に物理的な豊かさや利便性をもたらす一方で、人間を含む生物の生存環境を悪化させる原因となっている。このような問題意識から、1990 年代以降、日本では産官学を挙げて環境効率の向上を図るエコデザインに取り組み、優れた環境性能を持った製品を数多く生み出してきた。

ところが、個々の製品は優れた成果をあげているにも関わらず、環境条件は改善されていない。自然環境と共生しながら今後何世代にもわたって続けてゆくことのできるサステナブルな社会は、生産に関する技術的課題を解決するだけでは実現できない。生産と消費は表裏一体であり、生産の質と規模を適正化すると同時に、消費をも適正規模に是正しつつその質を高める必要がある。消費は個人行為である以上に社会・経済的、文化的な活動であるため、技術革新を進めると同時に、『社会意識改革』を引き起こすことが不可欠で、それによってはじめてサステナブルな社会の実現に繋がるのである。

私達が日々仕事として取り組んでいるデザインという行為は、機能・形を美しく整えることがその本質ではない。人と人、人と物との関係を整えて、ものごとを作りだすことを通して、新しい価値観の提示を行う行為である。私達も自分達の得意とする分野から、サステナブルな社会の実現に積極的に関わろうとの思いから、2006 年より、この「サステナブルデザイン国際会議」を開催してきた。創設時、目標として掲げたのは 20 年後の未来であるが、本会議では、目標の達成に向かって加速度的に仕事を速める必要から、毎年目標の年を繰り下げてきている。計算上、現時点と目標年が合致する 2016 年は、地球温暖化をはじめとする環境変化が顕在化するチッピングポイントとも言われている。それまでに目処を立てなければならない。

### ■ 開催履俯瞰図

各回の講演者や参加人数など、詳細はホーページをご覧ください。
www.sustainabledesign.jp

**Destination 2006-2026**
第 1 回サステナブルデザイン国際会議

**Destination 2007-2025**
第 2 回サステナブルデザイン国際会議

**Destination 2008-2024**
第 3 回サステナブルデザイン国際会議

**Destination 2009-2023**
第 4 回サステナブルデザイン国際会議

2008 年 12 月 7-9 日　港区立エコプラザ
**テーマ：Steer toward Sustainable Society ／サステナブルな社会に向けデザインの舵を切る**
特別講師に星川淳氏をお招きし、「行動するデザイン」のあり方をワークショップを通じて議論。「サステナブルデザイン行動宣言」を採択した。講師：方を議論し、「サステナブルデザイン行動宣言」を採択。 講師：星川 淳、トム・ジョンソン（アメリカ）、ラッセル・ケネディ（オーストラリア）、アアリス・シェリン（アメリカ）

2007 年 12 月 21-23 日　トヨタ白川郷自然學校（岐阜県）
**テーマ：Drawing a land map of a Sustainable Society ／サステナブルな社会のランドマップを描く**
世界遺産白川郷を会場に、到達すべきサステナブルな社会の姿を描き、成果は絵巻物「エコイノベーションで実現するサステナブルなライフスタイル 2025」として編纂し、「地球温暖化に関する総理懇談会」にて山本良一組織委員長より総理に提出。講師：山本良一、谷口尚（白川村村長）、黒崎輝男、アーネスト・ヤン・ヴァン・ハッタム（スイス）、シンギー・カルトノ（インドネシア）

2006 年 12 月 14-16 日　東京ビッグサイト
**テーマ：Finding a way to a Sustainable Society ／サステナブル社会へのロードマップを探す**
サステナブルデザインに関わる様々な領域の発表を通じ、細分化されたデザイン専門領域を超え統合的デザイン活動を開始することが火急の課題であることを確認。「サステナブルデザイン宣言」を採択。講師：赤池学、井口浩、池上俊郎、石田秀輝、植松豊行、エツィオ・マンズィーニ（イタリア）、加藤公敬、川原啓嗣、黒崎輝男、ジャッキー・デーン（イギリス）、テイ・ケェン・スーン（シンガポール）、フィリップ・ホワイト（アメリカ）、フランソワ・ジェグ（フランス）、益田文和、マリア・シシリア・ロスキャボ（ブラジル）、山本良一

### ■ 今後の展開

2016 年までに達成すべきサステナブルな社会における私達の暮らしは、一体どのようになっているのだろうか。その目標に接近する活動を報告し、確認し合うために本会議を開催してきた。既に議論は尽くされたと思う。様々な知見や先進事例についても学んできた。そこから見えてきた 3 つのことがある。1 つは、サステナビリティとは人類共通の課題であって日本をはじめ各国の利害関係を越えたところでしか解決できないということ。2 つ目は、その意味でも、もともと西欧の経済先進国に視座を置くサステナビリティという概念自体が再定義されなければならないということ。そして 3 つ目が、我々は未来の話をしているのであるが、それは常に過去を参照する行為であり、結局は今何をしているかという実践が問われているということである。そこで、我々は、まず日本と西側の立ち位置を外し、過去と現在と未来が混然一体となってダイナミックに動いている東南アジアに対話の場を求めることにした。今回はタイのバンコク周辺を旅しながらのワークショップを開催した。今後は日本とアジア諸国を行き来しつつ、多様性と柔軟性と復元力に富んだ社会づくりに参加してゆきたい。

**Destination 2016**
第 11 回サステナブルデザイン国際会議

Focus to Asian Sustainability

**Destination 2015-2017**
第 10 回サステナブルデザイン国際会議

**Destination 2014-2018**
第 9 回サステナブルデザイン国際会議

**Destination 2013-2019**
第 8 回サステナブルデザイン国際会議

**Destination 2012-2020**
第 6 回サステナブルデザイン国際会議

2012 年 12 月 11 ～ 13 日
タイ／バンコク及び各所にて
※詳細は本報告書をご覧ください。

**サステナブルデザイン国際会議**
**アンカンファレンス／デザイン前線会議**
**Design Front Line Meeting vol.1-3**
vol.1　2011 年 8 月 7 日　東北大学エコラボ（仙台）
vol.2　2011 年 9 月 13 日　東山温泉（福島）
vol.3　2011 年 10 月 15 日　東山温泉（福島）

**Destination 2011-2021**
第 6 回サステナブルデザイン国際会議

2011 年 12 月 17 日　東京ビッグサイト
**テーマ：Asian Sustainability ／アジアン・サステナビリティ**
より多様で柔軟性とダイナミズムを備えたサステナビリティをアジアから発していくには。講演会とワークショップを開催。講師:サミーア・サワカー（インド）、片岡勝、本村拓人、沖啓介、黒崎輝男、押切珠喜、岩瀬大地

**Destination 2010-2022**
第 5 回サステナブルデザイン国際会議

2011 年 2 月 26-27 日東北芸術工科大学（山形県）
**テーマ：Local Sustainable Community ／ローカル・サステナブル・コミュニティ**
地域固有の自然と風土に育まれる社会から、私達の将来の暮らし方を考えた。講師：山本良一、エツィオ・マンズィニ（イタリア）、千歳栄、ベニシア・スタンリー・スミス

**サステナブルデザイン国際会議**
**スモールンカンファレンス vol.1-3（デザインハブ）**
vol.1　2010 年 10 月 21 日「サステナブルな町・ダビュークに学ぶ」講師：山崎正人（アクイナス大学助教授）（デザインハブ）／ vol.2　2010 年 12 月 18 日「サステナブルデザイン国際会議拡大委員会／ vol.3　2011 年 1 月 22 日「地方でクリエイティブに働く･生きる」講師:logue、鹿野護（WOW アートディレクター）、小川直人（せんだいメディアテーク）

2009 年 3 月 13-14 日　桑沢デザイン研究所、東京ミッドタウン・デザインハブ
**テーマ：Sotial Innovation-ing ／社会イノベーション進行形**
若い世代が取組むサステナブルなビジネスモデルの事例発表を通じ、社会変革とサステナブルデザインの可能性をより身近に感る場を設けた。講師：アレックス・カー（アメリカ）、熊野英介、黒崎輝男、西村佳哲

# 第7回サステナブルデザイン国際会議

Destination 2020 2012

デスティネーション2020

The 7th International Conference of Design for Sustainability

## ■ はじめに

### アジアンサステナブルデザイン
### 環境共生型社会デザインのプラットフォーム構築へ向けて

「サステナブルな社会」の概念は、これまで主として欧米各国の経済的先進国を中心に議論され、組み上げられてきました。そのため、いわば「すでに持てる国」の論理が、「いまだ持たざる国」の思惑に先行する形で、現代文明の持続性に関する枠組みが形作られてきた部分がありました。しかし、経済活動がいかにグローバルな広がりを見せようとも、地域や歴史に根ざした文化と暮らしの固有性は残り、価値観の多様性が失うことはないでしょう。

特に、西欧諸国とは一線を画した文化的特異性と多様性を豊富に持ちながら、急速な経済発展を遂げつつあるアジア諸国は、必ずしも欧米流のサステナビリティの枠には収まらないダイナミズムを持っている。そのエネルギーを温存したままで自然環境とのバランスの保つアジア型のサステナブルな社会を築くことができるなら、それは、これからの文明の在り方のモデルたり得るのではないか。そのためにアジアの一員としての日本には何ができるのか。そして、そのプロジェクトにおいてデザインはどのような役割を受け持つことができるのか。そのことをアジアの人々と共に考えてみたい、そのような動機から、2006 年よりサステナブルな社会の実現に向け毎年開催している本会議は、7 年目にして初めて日本を離れ、タイ王国の首都バンコクでの開催をすることとなりました。

海外での開催は初の試みでしたが、アメリカ、インド、インドネシア、オランダ、カンボジア、ビルマ、タイ、日本、香港と9カ国から60名の参加者を得てバンコク郊外で行った二日間のトラベリング・ワークショップやランシット大学との共催による大規模な国際会議など、今までとは異なる新しい形と内容の会議となりました。

12 月 11 日と 12 日のトラベリング・ワークショップでは、人々の心の支えとしての仏教について学ぶと共に、少数民族の村や昔ながらの市場を訪れ寺院に泊まるなど、昔から続く暮らし方、マイノリティの問題や貧困開発と環境破壊など、現場を訪れ、体感することで始めて見える物が沢山ありました。

12 月 13 日（木）は、ランシット大学での国際会議 "Work in Progress" に合流して経済発展著しい東南アジアにおける社会変革を、豊かな自然環境と文化的多様性を活かしながらサステナブルな方向にチューンするにはどうしたら良いかを、インドネシア、日本、オランダからのスピーカー、タイからのパネリストとのディスカッションをいたしました。

これまでの会議、そしてタイでの会議の中で見えてきた、アジアンサステナビリティの可能性とこれからのビジョンについて、今後よりアジア、世界各国におけるサステナビリティをますます深度を高めていければと思います。



## ■ 開催概要

名称： 第 7 回サステナブルデザイン国際会議
Destination 2012-2020

会期： 2012 年 12 月 11 日（火）～ 13 日（木）

会場： **[ トラベリングワークショップ（11 日～ 12 日）]**
バンコクおよびタイ国内各地
**[ カンファレンス "WORK IN PROGRESS"（13 日）]**
ランシット大学（タイ）
Building 1 Arthit Ourairat Building,
Rangsit University
52/347 Muang-Ake, Phaholyothin Road, Lak-Hok,
Muang, Patumthani 12000 Thailand
www.rsu.ac.th

言語： トラベリングワークショップ = 英語
カンファレンス = 英語（日英タイ語同時通訳）

協賛： アズビル株式会社
一般社団法人大丸有環境共生型まちづくり推進協会
一般社団法人日本デザインコンサルタント協会（JDCA）

協力： U・store
Chang
Thailand Creative & Design Center（TCDC）

主催： サステナブルデザイン国際会議実行委員会
実行委員長：
益田 文和（東京造形大学教授）
実行委員：
岩瀬大地
酒井 良治（アールパートナー株式会社）
島田孝宜
津田 和俊（大阪大学 助教）
本田 圭吾（専門学校 桑沢デザイン研究所 専任教員）

共催： ランシット大学（タイ）

## ■ トラベリングワークショップ・プログラム

■ 2012 年 12 月 11 日（火）～ 12 日（水）
08:00 ホテル（バンコク）出発
10:00 ラオ・ソン民族村訪問
（昼食）
15:30 スナンタワナラーム森林寺到着
15:30 ～ 説法、瞑想等の活動
■ 2012 年 12 月 12 日（水）
07:00 お寺での朝の活動
（朝食）
11:00 スナンタワナラーム森林寺出発
（昼食）
15:00 ～ ドンワイ水上マーケット
18:00 ホテル（バンコク）へ戻る
（夕食）
19:00 グループディスカッション、プレゼンテーション準備

## ■ カンファレンス・プログラム

■ 2012 年 12 月 13 日（木）
9:00 はじめに
ピップラパイ・サラサリン氏｜ランシット大学准教授、芸術デザイン学部長
9:10 開会の挨拶
アーティット・ウライラット氏｜ランシット大学学長
9:30 講演 1「Magno Manifest」
シンギー・カルトノ氏｜ magno デザイナー、設立者
10:00 講演 2「Social Innovation Sustainability」
益田 文和氏｜東京造形大学教授、本会議実行委員長
10:45 講演 3「Work in Progress」
ハン・コニング氏｜プロダクトデザイナー、ハンゼ応用科学大学教授／オランダ、フローニンゲン
11:15 パネルディスカッション
「Work in Progress for Sustainable Design」
司会:オラパン・サラサリン氏｜ Studiomake ディレクター
パネリスト：
Makorn Chaowanich 氏｜タイ工業デザイン協会会長
Sirisak Kosspacharin 氏｜ TACGA、Imagimax 代表
Chatpong Chuenrudeemol 氏｜バンコク建築研究会長
プラビーン・ナハル氏｜ NID（インド国立デザイン総合研究所）インダストリアルデザイン学部主任
13:00 トラベリング・ワークショップ　プレゼンテーション
14:30 閉会（閉会後、展示会、ファッションショー、交流会等）

# トラベリング・ワークショップ
# Traveling Workshop

## 開会にあたって

11 日のトラベリングワークショップの出発にあたり、共催であるランシット大学のピップラパイ･サラサリン准教授より、ご挨拶を頂いた。また、本会議実行委員長益田文和より、これまでの本会議の経緯と目的、今回のこの旅の趣旨について説明があった。

## プログラム

**■ 11 December 2012**

| | |
|---|---|
| 08:00 | ホテル（バンコク）出発…❶ |
| 10:00 | ラオ･ソン民族村訪問…❷ |
| | （昼食） |
| 15:30 | スナンタワナラーム森林寺到着…❸ |
| 15:30～ | 説法、瞑想等の活動 |

**■ 12 December 2012**

| | |
|---|---|
| 07:00 | お寺での朝の活動 |
| | （朝食） |
| 11:00 | スナンタワララム森林寺出発 |
| | （昼食） |
| 15:00～ | ドンワイ水上マーケット…❹ |
| 18:00 | ホテル（バンコク）へ戻る |
| | （夕食） |
| 19:00 | グループディスカッション |
| | プレゼンテーションの準備 |





Lao Song (Thai Song Dam) Tribal Village

# ラオ・ソン（タイ・ソン・ダム）民族村

文・写真：津田 和俊／大阪大学 助教
Text, Photograph : Assistant Professor, Osaka University

## 地域に根差した暮らしと都市化の影響

今回のトラベリング・ワークショップで最初に訪れたのは、首都バンコクから南西にバスで約 2 時間の所に位置するペチャブリ県のラオ・ソン（タイ・ソン・ダム）民族村。タイ語でソンはパンツ（ズボン）、ダムは黒いという意味で、黒・濃紺色の伝統衣服をまとった、ラオス北部に起源を持つ少数民族が暮らす小さな集落である。戦争を背景として 18 世紀から 19 世紀までにラオスからペチャブリ県への集団移住が行われたといわれている。ここで暮らしている人々はみな菜食主義（ベジタリアン）で、まわりの田畑を耕して自給自足しながら、手縫いや機織りなど手工芸の伝統を受け継いで日々の生活を営んでいる。また、村では女性がコミュニティの重要な役割を担っており、近年では、都市部から訪れる人々に対して衣服や縫い包みなどの手工芸品を販売したり、踊りを舞ったり、郷土料理を振る舞ったりといった観光の受入によって現金収入を得ている。ここでは伝統的慣習を持つ共同体が維持されており、小さな経済圏や文化の継承の在り方に関して私たちが学ぶべき多くのものがある。その一方で、少子高齢化、進学や就職を機とする若者の都市部への流出、モータリゼーションや廃棄物の増加といったエネルギー・資源多消費型の生活様式の浸透など、急速な都市化に伴うアジア共通の課題を、このような少数民族の小集落においても感じざるを得ないという事実について身を持って考えさせられる機会となった。

**1.** 木製の織機に腰掛けて機織りをしている女性。織機は軒先や屋外など地面に置かれており、雨期には解体して移動する。 **2.** 地域で採取できる草木や木の実の皮などの植物から、赤茶･黄緑･濃紺といった色素を煮出し、その鍋や甕に布を漬け込んで染色をする。 **3.** 1 枚の葉っぱをささっと巻いて包みをつくる。もち米を使った蒸し菓子がはみ出ないよう、角をしっかり巻くのがコツ。 **4.** 伝統衣服では裾や首まわり、前立て部分などに色彩豊かな刺繍がほどこされる。伝統的な図柄だけでなく、モダンな図柄もつくられている。現在、ほとんどが販売用であるが、一部自分たちで着るものも含まれる。 **5.** 村の女性。電灯衣装の黒いパンツには、「スイカの柄」として、縦縞の模様が織り込まれている。 **6.** 高床式の住居。屋根の上には 2 本の角が生えている。階段を上がってすぐの部屋は家の精霊がいる神聖な部屋とされており、そこを通りぬけた中央の大きな部屋に集まって睡眠をとる。 **7.** 精霊崇拝、祖先信仰による様々な儀式が行われてきたことを伝えるミニチュア模型。

Wat Sunantawanaraam Temple

# スナンタワナラーム森林寺

文・写真：鈴木勝美
Text, Photograph：Katsumi Suzuki

Photographed by Rangsit University

## 世界がぜんたい幸福になるために、自分の内側にある幸せに気づくことからはじめよう

森林寺の僧侶たちは、うっそうとした森の中に点在する方丈に寝起きし、布施による一日に一度だけの食事をとり、黄色い素朴な衣をまとい、瞑想修行に励む。ブッダの時代から2600年変わらないライフスタイルは、サステナブルな社会のひとつのモデルとなりうるかにみえる。だが、〝物質的な簡素さ〟にのみ目を奪われてしまうと、このモデルの要諦を見失うことになる。

「私たちは人間として未熟なのです。物質的には豊かになり、多くの知識も得ることができました。でも、人間として〝本当〟は何をなすべきか、何を意図し、行動し、どのように言葉を使うべきなのか分かっていません」アチャンは続ける。（〝アチャン〟はタイ語。僧侶にたいする敬称）

「物質的豊かさは、決して幸せや平和を実現しません。真の幸せは、私たちひとりひとりの内側に、〝今ここにある〟ものなのです」

「私たちは通常、心に生じる我欲や貪欲にふりまわされています。我欲や貪欲は、幸せが〝外側〟にあるという妄想をつくりあげます。地球環境問題、社会問題、地域や家族、個人の問題。これらの大半が妄想ゆえに生じているといえます」

「全人類、そして全ての生きとし生けるもの、皆には共通した〝幸せでありたい〟、〝苦しみから逃れたい〟という二つの切実な願いがあります。それなのに、ほとんどだれも、内側の幸せに気づくすべを知りません。妄想の中に生きていることも知りません。それゆえ幸せを外側に求め続け、悩み苦しみから解放されることがないのです。

あなたが、地球環境、社会、人類という他者の幸せ、平和を願うのであれば、まず自らの内側にある真の幸せに気づき、智慧や慈悲の心を育てることからはじめなければなりません。自身が妄想の世界に住したままでは、たとえ良かれと思う行動であっても自己や他者に苦しみを生じさせてしまいかねません」

「苦しみから自由になることが、人間のなすべきゆいいつのことなのです。
真の幸せ、真の平和をあらしめる、智慧と慈悲ある心をつくりだすことが、過去数千年のベスト・デザインだと言えるでしょうね」

一日に満たない滞在ではあったが、〝苦しみから幸せへの転向〟の光を感じることができた深い森林寺体験だった。

**1.** 早朝、森の中のパゴダエリアで呼吸瞑想とセッション。森林寺の面積は約400エーカー（東京ドーム約35個分）。今では豊かな森となっているが、数十年前には伐採などで自然破壊されてハゲ山だった。日本人住職、アチャン・光男カヴェサコーが植林をし再生。周辺の村人も植林や寺院での仕事に従事することで、現金収入や教育の機会を得ている。**2.** 歩行瞑想を体験。〝今ここにある〟幸せを実感。**3.** 読経に参加。朝と夕、パーリ語（原始仏教経典に使われる言語）とタイ語による経を唱える。**4.** 僧侶の暮らすクティ（方丈、小屋）。森の中にポツン、ポツン、と。





DON WAI floating market

# ドンワイ寺院とドンワイ水上マーケット

文・写真：本田 圭吾／専門学校 桑沢デザイン研究所 専任教員
Text, Photograph：Keigo Honda/Kuwasawa Design School

## いつまでも未完成のローカルマーケットこそ

古来より水運とともに発展してきたタイの伝統的な水上マーケットの多くは、20世紀に入り道路整備に伴って陸上に移設されはじめ、1950年頃からは氾濫対策で河川に水門が設置されるようになると水路もその役割を陸路に譲ることになった。既に水運はほぼ機能していないというのにバンコク周辺で見るあの賑やかな水上マーケットの風景は、ノスタルジックな水上貿易を再現したいわば国の観光事業としての完成形でもある。バンコクの中心部から西へ30kmほどのナコンチャイシー川沿いにあるドンワイ水上マーケットは、食材を満載した木船が川面にひしめき合い、活気で賑わう屋台が…見当たらない。代わりに、店の奥に居住スペースが覗きこの場所に根付く実生活を垣間見ることができる。想像していたよりはるかに静かな雰囲気。〝水上〟というより寺院の門前市場が河畔にせり出したウォーターフロントマーケットであり、故に辛うじて水運の衰退から逃れ、かつ地元のコミュニティが残って生き延びたローカルマーケットだ。しかし甚大な被害を出した2011年の洪水を機に一層加速する国の治水灌漑整備のスピードに、河川と共に生きるこの小さなマーケットは耐えられるか。観光マーケットへの転換も存続の道の一つだろうが、願わくは地域コミュニティを保ち続けるいつまでも未完成な地元市場であり続けてほしい、というのはよそ者の身勝手だろうか。

**1.** 営業店舗が数件だけになった時代もあるというドンワイ水上マーケットは寺院の門前市場。2011年の洪水ではこのマーケットも冠水して、一時閉鎖した。 **2.** ローカルで素朴な市場の雰囲気での買い物もまた楽しい。 **3.** 狭い小道が奥に奥にまだまだ続く。 **4.** 店の脇に実生活が垣間見える。**5.** 時折覗く水面で水上だと気付く。 **6,7,8.** フィルムだけの美しいパッケージと感じるも、プラスチックが目障りというカンボジアからの参加メンバーの視点にハッとする。

# カンファレンス「ワーク・イン・プログレス」
# Conference "Work In Progress"

## ■ 開会にあたって

基調講演会「Work In Progress」の開会にあたり、共催であるランシット大学准教授・芸術デザイン学部長、ピップラパイ・サラサリン教授、及びランシット大学学長、アーティット・ウライラット氏からご挨拶を頂いた。

## ■ カンファレンス・プログラム

9:00 はじめに
**ピップラパイ・サラサリン氏**｜ランシット大学准教授、芸術デザイン学部長
9:10 開会の挨拶
**アーティット・ウライラット氏**｜ランシット大学学長
9:30 講演 1「**Magno Manifest**」
**シンギー・カルトノ氏**｜ magno デザイナー、設立者
10:00 講演 2「**Social Innovation Sustainability**」
**益田 文和氏**｜東京造形大学教授、本会議実行委員長
（10:30　休憩）
10:45 講演 3「**Handmade industrial design**」
**ハン・コニング氏**｜プロダクトデザイナー、ハンゼ応用科学大学教授／オランダ、フローニンゲン
11:15 パネルディスカッション
「**Work in Progress for Sustainable Design ／サステナブルデザインに向かう過程**」
パネリスト：
**Makorn Chaowanich 氏**｜工業デザイン協会会長、Cerebrum Design ディレクター
**Sirisak Kosspacharin 氏**｜ TACGA、Imagimax 代表取締役社長
**Chatpong Chuenrudeemol 氏**（バンコク建築研究会（B/A/R）部長
**プラビーン・ナハル氏**｜ NID, The National Institute of Design
（インド国立デザイン総合研究所）インダストリアルデザイン学部主任
司会進行：
**オラパン・サラサリン氏**｜ Studiomake ディレクター
（12:00　昼食休憩）
13:00 トラベリング・ワークショップ　プレゼンテーション
14:30 閉会

講演 1

# 「magno-manifest ── マグノの考え方」

シンギー・S・カルトノ／ magno ブランドの設立者、ピランティ・ワークス代表（インドネシア）

**1** magno の代表的製品、木のラジオ。**2** ブランド名は「Magnifying Glass（虫眼鏡）」という言葉から来ている。虫眼鏡のように「小さなものに焦点をあてる」という意味をこめている。**3** 工房の前で育てられた苗木は無料で配布され森の一部になってゆく。**4** 環境によい働きかけをすると、環境も応えてくれる。

**Singgih S Kartono　シンギー・S・カルトノ**

プロダクトデザイナー、magno 設立者、piranti works 代表。インドネシア・ジャワ島の西方にあるバンドン工科大学でプロダクトデザインを学ぶ。卒業論文のテーマ「インドネシアのハンドクラフト技術を用いたラジオレシーバーのデザイン」で、1997 年 度 International Design Resource Award 受賞。（現在販売されている magno 木のラジオの原型）卒業後、ハンドクラフトを専門とする企業のデザイナーとなり、2003 年に工房 piranti works を設立。地元農村に住みながら現地の木材資源を活用した製品デザインを行う。地域住人を職人として起用し技術教育と雇用促進を行っている。また、会社の売上げから、原料となる木材の保護育成活動も行っている。magno シリーズは現在、日本をはじめ、ヨーロッパ諸国やアメリカでの販売を開始し、好評を得ている。

## 「有限」を教えてくれる素材

木は完璧な素材です。木の中に、私たちは強さと弱さの両方を見つけることができます。また荒さと繊細さもあります。それは、長所であり、また、短所でもあります。木は硬く、しかしながら、地に戻り、完全に環境に適応しています。完璧な素材とは良い「バランス」を持った素材だと私は信じています。このようなバランスを持った素材はは私たちに「有限」の意味を教えてくれます。

木の美しさはその歴史から生まれてきます。木の成長は驚きの行程であり、そして、それは年輪として記憶されます。洗練された仕組みがあります。ほんの小さな木の種は、人間がこれまで作ったどんな機械よりも複雑なものに成長するのです。木は生命感に溢れた素材であり、それは、終わりの時間が訪れたら、美しく、意味のあるかたちで、自分自身を自然に還すのです。

## デザインを再定義する

私は今まで、市場調査によってデザインをはじめたことはありません。私は世界、または地域でおこる出来事や、日々、私の身の回りに起こる平凡な、小さな出来事への注目からデザインをスタートします。私はこれらの人々にとって、よりよいものは何だろうか？ということを考えるところからスタートします。私は、ビジネス、経済活動を所有していることを承知しています。しかしながら、私はよく、人々が経済的な欲求により動かされたとき、多くのことは悪い方向にすすむことをよく見ています。

私はユーザーと物（製品）の間の関係は単に、主と目的の関係にすぎないものではないと強く信じています。それは物が、私たちの生活の不可欠な一部であるという関係です。テクノロジーの前進と経済の競争は洗練された特徴の製品を生み出しました。それは、私たちの生活の中の様々な事を簡単にできるようにしましたが、その一方で、それは主従関係のような行動を生み出し、同時に表面的で一時的な関係を生み出しました。我々は、よりよいものにそれを変化させていくために、この行動に注意する必要があります。自然素材を現代的な製品に組み合わせることは、一種の、魂を具現化する儀式だと思います。製品を生きたものにします。私の目的は、少し前まで私たちがそうだったように、私たちを自然に対して敏感にすることです。

## 意図した不完全な製品

デザインの行為において、私は不要な機能を最小限に抑えることによって、完璧ではない製品をするよう努めています。この不完全さは意図であり、ユーザーと私たちの製品が、お互いに深く関与することを与えることを期待した繊細な創造行為です。

すべての私の製品はコーティングなどの加工がされていません。ただ、仕上げにウッドオイルを用いているだけです。しかしそれは、持ち主が木を感じ、また、その持ち主が自分が製品の唯一の保護者であるとして、木に注意を払う機会を与えるでしょう。私はメンテナンス不要という製品に同意しません。私たちは私たちが購入した製品をケアし続けるべきだと思います。これは、私の呼ぶところの、製品を持つものと製品との間の道徳上の契約ではないかと思うのです。

私はシンプルな形状が好きです。私はそれが、製品の寿命を長くすると信じています。自然素材を使用し、細部にまでよく検討されたシンプルな形状の私たちの製品は、製品がユーザーと深く関わることを目的としており、そのようなことを製品に組み込むことを提案しています。

私たちにとってデザインは、ただ美しい形状にデザインされ、膨大な量として生産され、消費される製品を造ることだけではありません。デザインは、『問題を解決する』または『問題を最小化する』方法でなければならないと思っています。

## Less Wood More Works<br>最小限の木で最大の仕事を

小さく機能的な木製品は、材料を節約しながら、インドネシアの村々が直面している多くの問題の一つである、仕事を提供することに積極的に貢献します。職人の高い技術で商品をよい価格で売ることが可能になり、市場の安定化を実現することができます。このデザイン手法は、歩合のよいかたちでの材料の使用と、高い労働収容力を生み出せるという結論を描くことができます。

少ない材料を使用する、ということだけでは十分ではありません。木材の消費者として、私は私が使用した木材に対する道徳的な責任を感じます。それゆえ、森から使った一つ一つの木材すべての再植林を行っています。これは私が行ったすべての生産活動は、自然を破壊しないことを保証します。再植林の木の量と種類の選択は、私たちの年間木材消費量と、成長して伐採される木材に適した年齢と、樹木 1 本当たりに必要な土地の広さに基づいています。現在、私の故郷であり、活動の場であるカンダンガン村はあまり森林を持っていません。

森林の再生に関して、私たちは、私たちの生産活動で使用する木々を育てております。私たちが雇ったすべての人にとって、最も重要なのは、私たちの森林再生プログラムを通して、より多くの木を生み出すということです。また、地元の中学校と共働し、環境分野でのカリキュラムを作り実践しています。学生たちは、木の種の育成を手伝ってくれています。種は植えることができる程の苗木に成長し、学校の周囲に植えられました。まだ木はあまり大きくはありませんが、学校はゆくゆく、木々に囲まれたものとなるでしょう。すべてのこの活動は当社の販売収入の一部で賄われています。

私の会社ピランティ・ワークスは、30 人の従業員を擁しています。彼らは地元の人々です。彼らは年間わずか約 50 ～ 100 本の木を使用します。工房の前の土地は、私たちが村人たちに無料で配布する木の苗床として使用されています。私は村人たちに正しい経済活動が持続可能な環境に向かって積極的な貢献を与えることを教えたいという意図から、これらの木を無料で配布しています。我々が持続可能な環境を議論するとき、一つ、我々が忘れてはならないことは、私たちは同時に、大規模な経済活動についても議論しているのだということを忘れてはなりません。

## 環境問題は暮らし方により<br>引き起こされている

サステナビリティを実現してゆくたいめに、最も基本として理解しなければならないのは、環境問題は欠陥のある暮らし方により引き起こされているということです。人間は、地球に生息している賢い生き物でなければなりません。しかし、我々は我々のホスト（宿）を破壊するという頭の鈍いことをやっています。すべての環境破壊は、人間によって引き起こされています。我々は生産と消費のサイクルの中に住んでいますが、私たちはその資源が限られていることを忘れてしまい、そのサイクルは、より大きく、より早いスピードに成長し、コントロールできない状態になっています。環境破壊は、私たち皆を目覚めさせる呼びかけであるべきです。私たちは、私たちの暮らし方をリ・デザインし、よりよい生き方に向かっての手順を実行するため、踏み出すべきです。

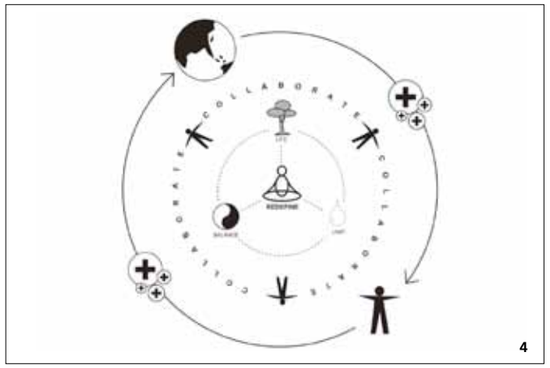
この数世紀で、科学技術の進歩を追求しながら、人間の生活の中で重要な側面を我々は放棄してきたのではないかと私は思っております。私たちは、人間の精神的な側面を忘れてしまったのではないでしょうか。精神性は、私たち人間の輝かしい心の一部であり、分離することはできない側面です。我々は、高度な競争と進んでいると思いますが、しかし、もはや賢明な行動をしているとは思えません。

デザイナーとして、私は私たちの暮らしの質に貢献するデザインを生み出そうと努力します。それは、あたなの生命活動であり、あなた自身の個人的な発展を含みます。私は私の生き方として、この選択ができるということに感謝しています。今日私たちが直面している現在の状況では、多くの森は容赦なく産業のために使用され、消費されています。これは資源の枯渇への道です。このようなことは、材料の使用を少なくし、労働者をより多く使用するビジネスの構築できていない、ということが原因で起こります。

経済活動の新しいアプローチとしてのサステナビリティは新しい考え方ではありません。それは、現在、そして来るべき時の私たちの経済事業の新しい魂と精神、そして未来の青写真となるべきです。我々の経済の追求が大きな利益を生み出し、そして更なる環境破壊をしている状況で、我々は成功を主張することはできません。

私にとってサステナビリティとは、たんなる、自然破壊を避けようとする暮らし方ではありません。それだけでなく、私たちは環境を改善してゆく方向に行動をとるべきです。

利益とは、我々が得る資本によってのみ測定されるべきではありません。どのように我々が、我々の環境を向上させることができるか、こういった視点でも測定しなければならないと思っています。





Conference "Work In Progress" / 13th December 2012

講演 2

# 「アジア的サステナビリティを求めて」

益田 文和／東京造形大学 教授、サステナブルデザイン国際会議 実行委員長

**1** 1853（嘉永 6）年のペリー来航を契機に、日本の鎖国政策は終わりを告げ、日本は国際社会の中に。 **2** 日本の国土の 70%は山。農業や都市開発に使える土地は 30%。食料自給率は 40%。 **3** 東日本大震災直後の南三陸町。 **4** 震災後、節電により 20%ほど暗くなった東京の街は落ち着いた風情を醸し出し、決して悪くない印象を持った人も多かったと思われる。

**益田 文和　Fumikazu Masuda**

1949 年東京生まれ。東京造形大卒業後、国土建設、デザインオフィスを経て 1978 年よりフリー。その後 frogdesign デザインディレクターを務め、1991 年株式会社オープンハウス設立。製品デザイン開発や地域産業のデザイン振興、また、エコデザインやサステナブルデザインに関する国内外のプロジェクトに関わる。東京造形大学デザイン学科教授。有限責任事業組合エコデザイン研究所代表。o2 Japan リエゾン。財団法人日本産業デザイン振興会理事。一般社団法人日本デザインコンサルタント協会理事。各媒体への執筆等多数。
www.openhouse.co.jp
www.ecodesigninstitute.com

## 日本のものづくりの背景

関係者の皆様、お招きいただきありがとうございます。重要な考え方について話し合うためにやってまいりました。

まずは、日本のものづくりの歴史的背景について説明します。ご存知の通り日本列島の面積を合わせてもタイの 70%に過ぎず、しかもその 70%は山で、農業や都市開発に使える土地は 30%に過ぎません。このような不利な条件下でも、私たちは他の多くのアジアの国々と同じように豊かな工芸の文化を何世紀も楽しんできました。絹織物、竹細工、木工、漆器、陶磁器、そのどれもが自然素材で作られています。家でさえも木と紙と草と土と石で造られていました。そのどれもがいわゆるカーボンフリーのサステナブルな素材なのです。それらは鳥の巣がそうであるように自己完結的で理想的なものづくりです。

## 急激な成長を支えた<br>原材料・生産エネルギーの輸入

しかし、19 世紀後半、外国の脅威から 200 年間ぶりに開国するとともに列強との競争を余儀なくされます。それ以降日本は 1 世紀半に亘って世界を相手に経済的、技術的、文化的そして不幸にも軍事的に競い合ってきました。1945 年に最終的な敗戦を迎えた時、この国は完全に破壊されていました。しかし、その後 10 年足らずで日本は様々な製品を造り出し、世界に向けた輸出を再開します。

しかし、それらは日本製品であっても、その材料や生産方式は伝統的なものとは全く異なります。私たちは金属から石油化学製品まで原材料から生産のためのエネルギーまでその大部分を輸入せざるを得ませんでした。この生産システムは重大な環境破壊と環境汚染そして地球資源の枯渇を招いてきました。その挙句に、造られたものはゴミとなって大きな問題を生んだのです。

## エコデザインへの動き始まる<br>環境問題を解決するには不十分

1995 年に京都の法然院で各国のデザイン関係者 250 人が集まって最初のエコデザインワークショップを開きました。そこで、我々はデザインや製造をより環境と調和しながら行うにはどうしたらよいかということについて議論しました。

それ以降の 20 年間、我々はいわゆるエコデザインの開発に努力を払い、日本ではかなりの成果を上げることができたのです。それらは、技術的な成果であり、市場での成功であり、もちろん経営上も貢献したのです。

しかし、残念ながらそれらは環境問題を解決するには不十分であったと言わざるを得ず、状況はさらに悪化しているのです。その理由は明らかです。燃費のいい車が手に入れば以前よりもっと乗るようになるでしょう。家電製品が省エネ型になればエアコンを各部屋に付けたり、冷蔵庫もテレビも大型に買い換えるかもしれません。その結果エネルギー消費はかえって増えてしまうのです。こうした悲観的な状況から、私は技術改革と並んで社会改革が必要だと思うようになりました。

## サステナブルデザイン国際会議

そうした動機からサステナブル・ソーシャルデザインを追求するために、2006 年からこの「サステナブルデザイン国際会議」をはじめました。今回が 7 回目になります。

その研究から重要な疑問が浮かび上がってきました。「私たちはどのようにして 70 億の隣人に配慮しながら、今後何世代にも亘って続けて行けるように社会をマシな方向に変えて行けるのだろうか?」

## 3.11 で浮き彫りになったこと

そしてこの疑問は 2011 年の東日本大震災とそれに続く福島第一原発の事故以来膨らむばかりなのです。地震と津波の被害は大変なもので、被災者の方々には心からご同情申し上げます。世界有数の地震国でしかも周囲を海に囲まれた島国である日本は、歴史的に何度も地震と津波を経験してきています。しかし、今までと今回とでは決定的な違いがありました。それは、これまで原子力発電所という厄介なものは存在しなかったということです。

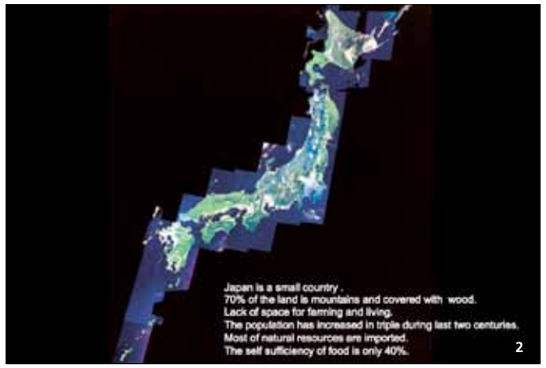
34 万人が避難し、6 万 2 千人が既に福島県外に移転し、広島原爆の 168 倍のセシウム 137 が放出され、東北地方から関東地方に亘る何千万人もの人々が今も放射性物質の恐怖にさらされているこの大災害が人々にもたらしたものは不信感です。科学技術に対する過信と、その上に作り上げたエネルギーインフラ、そしてあくまでもそれに依存せざるを得ない現代文明と社会体制に対する不信感です。



Conference "Work In Progress" / 13th December 2012

1

3




2

4

政府が打った大がかりな節電キャンペーンも、多くの人にとって、原発なしの社会に対する不安をあおる目的を持った政治的プロパガンダのように見えてしまいました。しかし、それとは裏腹に節電によって 20%ほど暗くなった東京の街はじっとりと落ち着いた風情を醸し出していて、決して悪くない印象を持った人も多かったと思います。

54 基の原発の全てが停止するという事態を受けて政府が国民に問うた将来のエネルギーミックスに対する意見聴取の結果は、2030 年までに原発ゼロを希望する答えが 87%を占めるというものでした。電力事業各社は LPG などによる火力発電を強化することで急場をしのいでいるという状態ですが、今後に対する不安は消えていません。

いずれにせよ、平常時でも月に 1 万回を越える地震が発生している地震大国である日本列島に原子力発電所の様な安全管理上未完成な施設を稼働させることは、あまりにもリスクが高いと言わざるを得ません。

3.11 以降、若い世代の中に新しいライフスタイルが芽生えています。ある若者たちのグループは地方の森の中にセルフビルドで建物を建て、農業を始め、牛を飼い、加工食品のデザインから製造、販売までを行う 6 次産業化を目指して活動しています。そのほか多くの若者が地方の村や奥深い山間部で情報系のクリエイティブな仕事と先進的なライフスタイルを両立させようという試みを始めています。

しかし、彼らはまだ少数派に過ぎません。大多数の若者たちは、大企業といえどいつまでも安泰ではないことを承知の上で、それでも少しでも安定した社会的地位を得なければならないという強迫観念に駆られて、必死で就職活動を続けています。若者たちの中に、今までとは異なる革新的な生き方と、今までにも増して保身的な生き方に二極化する傾向が生まれつつあります。そのどちらの動きも、不安によって引き起こされているのです。

## 本当は貧しい国、<br>日本としての視点

日本のエネルギー自給率は 4%に過ぎず、食糧は 40%、鉱物資源に至ってはほぼ 0%というのがこの国の真の姿です。この数字からだけでもこの国が世界の中で自立してゆくにはいかにひ弱であるかが分かります。

私は最近、この地球を 70 億人でシェアすることについて、経済大国の国民というより、本当は貧しい国の住民の視線で真剣に考えるようになっています。

サステナビリティということ、われわれはどうしても西欧的な概念でとらえがちです。しかし欧米の友人たちと長い間この件で話をしてきて思うのは、彼らが自分たち以外の圧倒的多数の人々のことをどれほど真剣に考えているか疑わしいということです。

それというのも、かれらの思想や努力に関わらず、日本を含む経済先進国の人々は自分たちの暮らしの質に固執しているからです。本気で 70 億人がたった一つの地球をシェアすることを考えるのであれば、地球がもたらす共有財産を 1 人当たり均等に分け合うか、それが無理ならせめていわゆる持てる国が可能な限り取り分を減らして、可能な限り持たない国に対する支援に回す以外に方法はないのですから。

日本を持てる国であると考えるのは誤りです。もし、われわれが貧しい国の一つという立場に立てるなら世界観は一変します。

アジアの国々が皆の共有財産である自然を大切にし、お互いに支え合いながら暮らしてゆくことは、私たちが生きるための基本条件ではないでしょうか。今こそ、アジア的サステナビリティともいうべき考え方を構築し、今までとは異なる新たな未来の在り方のモデルとして世界に対して提案するべきではないでしょうか。アジアには、サステナビリティについて我々が学ぶべき知恵が豊富にあります。自然や文化の多様性、社会的な復元力、そして進歩と伝統の二つの基準を持ちながら生きるという特徴をアジアの人々は持っています。アジアのサステナブルな生き方とは、自然が与えてくれる富と脅威とともに生きる、質素で柔軟性に富んだ暮らし方なのかもしれません。

今回試みたトラベリング・ワークショップは、アジア的サステナビリティとサステナブルデザインを探し続ける長い旅の始まりにすぎません。皆さまのご協力に感謝しつつ、近いうちに再びアジアのどこかで一緒に旅ができることを楽しみにしています。

# 微笑みのタイ経由、つぎを探す旅へ

文：酒井 良治／アールパートナー（株）代表
Text : Yoshiharu Sakai R Partner Inc.

Photographed by The International Conference of Design for Sustainability

## バックパッカーの聖地からのスタート

バンコク名物の渋滞、朝夕のラッシュの酷さにはウンザリさせられる。渋滞をさける高速道路が次々に建設され、さらに高架鉄道のスカイトレインが重なる。中心部はもとより郊外にも高層ビルが次々に建設される。バイクタクシーのライダーの背にしがみついて移動する忙しいバンコクの友人たちのFacebook からはしばしば「今日も渋滞」の投稿。バンコクはアジアの都市の中でも最も成長への勢いのある都市である。　いっぽうで旧市街には世界中のバックパッカーの心をつかんで離さないエリアが残る。なかでも代表格のカオサンロード界隈には、安宿やホテルが 100 軒以上集中し、レストラン、ネットカフェ、マッサージ、数十バーツで腹をみたしてくれる屋台があふれかえる。

一年中強い日差しに照りつけられるこの街に、多国籍の人々が自分たちのカルチャーを持ち込んで暮らしている。にも関わらず人々が穏やかで微笑みにあふれるのは、旺盛に繁茂する大樹の落とす日影と花の香りを乗せたさわやかな風のおかげかもしれない。

今回バンコクで開催した第7回目のサステブルデザイン国際会議の私たちのトラベリングワークショップはここから始まった。日本各地から、ヨーロッパ、インド、香港から、そしてカンボジアからは 10 時間もかけて長距離バスで学生たちが集まってきた。

タイの風景といえば、寺院にはじまり寺院に終わる、とよく言われる。観光もしかり。大きな寺院（ワット）はもとより都市部にも郊外にもいたるところに祠（プーム）があり一日中線香の煙が絶えることなく、人々が祈りを捧げている。何度タイに足を運んでも印象的なのは、タイの人々の誰もが、相手に手をあわせて、サワッディカー（こんにちわ）、コップンカー（ありがとう）、やさしく微笑んでくれる姿、プームに足を止めて手を合わせる姿。この人々のやさしさ、思いやりの心、仏教に対する信仰心をベースとした敬いの作法こそがタイの魅力だ。タイのデザインにはこういう風土が少なからず影響している。

## 「つぎ」を探すトラベル

タイのデザインといえば、いまだに高密度に仕立て上げられる質の高いテキスタイルや籐家具、北部のチェンマイ中心に作られる陶磁器 ... という印象が強いかもしれないが日本の自動車産業、カメラ、ほかの工業製品でも主力工場はタイの工場という日本メーカーは少なくない。比較的まだ安価な労働人件費にくわえ、勤勉で仕事の丁寧なタイ人の作業は信頼性が高いという。世界中に工場のある或るメーカーでも工場生産における不良品発生率の低さは世界一だそうだ。

いっぽう、タイ自身の新産業の振興はと言えば、日本が戦後 50 年かけて築いた工業立国の姿、そしてその後 20 年、そこに寄り添ってきた工業デザインも同じく、今にいたって次のレーゾンデートルを探し続けているのを横目に、クリエイティブインダストリー、エコデザイン、サステナブルデザインにその次の可能性を見いだして、つぎつぎに大胆な施策を打ち出して進んでいる。首相府が主導する大規模なクリエイティブ振興施設「タイ・クリエイティブ・デザインセンター（TCDC）」はニューヨークの MOMA とも連携して魅力的な活動をしているし、商務省は日本のグッドデザイン賞と連携する「デザイン・エクセレンスアワード（DE 賞）」を創設し、大きな成果を生んでいる。

今回、ランシット大学での会議のクロストークに参加してくれた、友人でタイデザイン界の次世代リーダーであり、DE 賞の審査委員もつとめる Somchai Jongsang（ソムチャイ）氏も、デザイナー達の目線はエコシステムのデザイン、ソーシャルイノベーション、医療や健康領域のデザインにあると語っていた。今回はじめて日本を飛び出して開催したサステナブルデザイン国際会議は、異なる文化や背景をもつ参加者同士の密度の高い交流により、大きな成果を得て終えることができた。次回も東京を離れた九州の地で行う予定だ。

2016 年にむけてサステナブルデザイン国際会議のトラベルはまだまだ続く。

■ 本会議報告書、及び過去に開催した会議の報告書は、下記ホームページにて公開しています。

**www.sustainabledesign.jp**

■ For English Information, please see our web site.

**www.sustainabledesign.jp/e/**

**第 7 回サステナブルデザイン国際会議 Destination 2012-2020 報告書**

2012 年 5 月 31 日　発行

発行：　サステナブルデザイン国際会議実行委員会

編著：　サステナブルデザイン国際会議事務局

問合先：　サステナブルデザイン国際会議事務局
105-0013 東京都港区浜松町 2-3-22 GENZO Building 4F
（有限責任事業組合エコデザイン研究所内）
TEL. 03-3578-1457　FAX. 03-3578-1459
mail@sustainabledesign.jp　www.sustainabledesign.jp

©2012-2013 The International Conference of Design for Sustainability